



リステラス星圏史略
古資料ファイル 2-2
(女神の娘とその孫たち)



(発掘整理一旦完了)

霧樹里守 & 土岐真扉

《 大 地 世 界 》
物 語

(女神の娘とその孫たち)

(地 誌 と 年 代 記)

『大地世界（ダレムアス）の変遷』 (@中学授業中?)

2006年7月6日 [連載（2周目・大地世界物語）](#)

- 創世（精霊代）混沌
大地母神（マリアンではない）と聖霊、精霊たちによる国産みの時代。

- 神の時代
女神マリアンの目覚めと始源の人間達の誕生。諸神の参集。
始都マドリアウィ建設。四国神戦役。（始めが原の合戦）。

- 神人の時代
女神就眠。多数の神々が大地世界を去り、また人々の間に身を隠す。
鎖国の完成。始祖皇朝成立。

- 人の時代
大地の成長にともなう人の生活圏の拡大。
始祖皇朝断絶。新都モルドマスリス遷都。
数皇朝を経て、いつしか始源の都の位置、失われる。
《国》の概念の成立。ソリテイン大路の乱による初期皇朝代の終息。
奢国海没す。

中期皇朝代の開始。数代ごとに皇朝・皇都が交替し、
皇道の発達と諸国の誕生をうながす。

地球人たち、正式にティカース領を与えられる。
また、この頃、始めて砂原越えをする者現れる。
大都皇朝・木都皇朝を通じ急速に発展。

旧都モリナウィエア皇朝後期に至り、
西（モルナス）第一代皇ハネルン、皇位継承権を主張。
東西分裂期。
モルナス第3代に至り講和なる。
東皇朝（正統皇家）のルア・マルライン遷都。

白都第7代マダガラルに、

東の森の仙族セイウィラワラノリウィラワマ（仙女皇）降嫁。

大異変おこる。ボルドム侵攻による白皇都滅亡。

中期皇朝代終わる。混乱の大戦期を迎える。（>地球西暦1994年）。

マリノ平原の合戦。この後、大地の成長とまる。（>地球西暦2060年代）。

後期皇朝代。この時期に属するのは戦都皇朝3代のみである。

かつて類を見ぬほどに皇権が強まり、来たるべき戦いにそなえる中央集権国家となる。

対ボルドム決戦初期に若くして即位せる女皇マリス・スピア、

天球界の女神リーシェンソルト探求の旅に出で、遂に還らず。

これをもってダレムアスの皇位継承権絶ゆ。

暗洞界滅亡。大地世界の収縮はじまる。

○ 人の子の時代

末期皇朝、正確には摂政制時代である。摂政職第8代に至り、

皇、大地世界ゆかりの不思議の旅人リレキスを具してダレムアスへ還る。

《鋭どき人》（リレキス）、超光船フェアリスティラーヤ

90余隻を建造。

生き残りしダレムアト大地を捨てる。

大地世界、滅ぶ。

『 四国神（よんこくしん）物語 概略 』

(@中学1～2年？or高校？ 大学ノートにシャーペンで縦書き)

2007年6月6日 連載 (2周目・大地世界物語)

さらに時代は下って、ハジメノハラには人間の“国”と呼べるだけのものができあがりしました。ハジメノハラの北西にあたる山地のはずれ、なだらかな丘陵地帯のふもとに築かれた神宮（じんぐう）マドリアノビ（マドリアナビ？）を中心に、暖かな地方に向かって肥沃な畑や、実り豊かな水田が広がり、その所々に、いくつかの村、いくつかの町、いくつかの庄がありました。

神宮殿（マドリアノビ）はそれだけで一つの都市であり、同時に一つの家であって、工芸や建築にたけた神々が何年もかかって造り上げた美しい都（みやこ）でした。

塔や二階建は少なく、土地の起伏に沿って、点在する小さな白い館を三つ四つ、五つ六つと渡り廊下でつなぎ、中庭表庭なども含めて生け垣や白い土塀で囲いました。

とりわけ長い廊下には優しい東屋をもうけ、垣と垣の間や中庭や広場などには質素な輝きを持つ石段や石畳の細径小径。大道、大路には泉水や、虹のようなたいこ橋、目もあやな歌舞殿などが随所に設けられていました。

マドリアノビができて数十年たつと、神々は異世界へ通じる“道”の扉を除々に開け放ってゆきました。

まず初めは女神マライアヌの姉リーシェンソルトの治める

(※未完※)

[大地世界物語 ～人代編～（地誌と年代記）](#)2006年4月7日 [連載 コメント \(1\)](#)

【地誌】

[山脈]

はじめに世界は無辺無窮の大なる平面として成された。平面は無毛の砂漠であった。女神と仲間たちの御幸に伴い、その足音や舞の音色の韻律につれ大地に起伏が成り、《智水神》が数々の泉を呼び出すに従い、あたりに緑が芽生えた。緑の命は広がり、木陰と草原とを形作った。その緑の命をはむ者らが産み出され、それらの巢穴や集落があちこちに形作られた。

暗洞界の魔軍が攻め来たり、智水神が帰天して後、大地に泉の増えることは無かった。大地母神が大地の深奥で界果てまでの眠りについた後、その周辺の地は眠れる女神の放つ夢の気を受けて徐々に隆起をはじめ、長い年月の間に、その頂きが大気の稀薄な天上界に近づくほどになり、大地世界の中心をなす《大地の背骨山脈》と名付けられるに至った。

[水脈]

《大地の背骨》の中心に位置する《智神の最初の泉》からは尽きることなく命の真清水が湧き、背骨の隆起に伴って取り残された盆地を満たして《太古の湖（うみ）》となった。ほどなく水位が限界まで上がり、やがて盆地の北東端の《界果て峠》の岩壁を打ち砕いて山脈を流れ下った。幾つもの峡谷と溪谷と深い淵や穏やかな岸辺を刻んで大地世界最長の大河《銀波清流》と呼ばれる。大河は北東に下り、山裾で北西に転じ、西南に蛇行して白の街道の半ばで大なる瀨を分け、大地世界最大の水面（うみ）である《北方太湖》と、南に遠く離れて砂漠に流れ込み、地熱で干上がりかけた《南方塩湖》の、源流でもある。

[版図]

《銀波清流》沿いの気候温暖な各平野と、《北方太湖》周辺の起伏の激しい森と草原地帯、《南の曲流河》沿いの高温多湿な湖沼地帯、そして西の半砂漠地方が、地人族の主な版図である。

東方の広大な樹林地帯はもっぱら翹仙族と飛仙族、鳥人など《飛ぶ民》の居住空間であり、大地の背骨山中には、数多の獣人種族の領土とともに、ひそかに隠れ住む魔軍の裔の罨砦などがある。

その他の、生身ある者にとっては過酷な環境の諸域には、今も女神の仲間の末裔や、幻獣、精霊などが疎らに回遊している。

[大地世界物語 ～人代編～（地誌と年代記） I](#)

2006年4月8日 [連載](#)

【年代記】 I

[神統譜]

女神の娘の無名のひとりたりは地人族として生き、逝きし《智水神》の道半ばであった指導を惜しんでその智慧を祀る《智水神殿》を建て《智水学派》の開祖となった。短い寿命を全うし大地のめぐりに還った。

女神の娘の名のあるひとりたりは半神女として在ることを選び、残された地人族を統治し、また半神たる真力を以て魔族の残党を狩り、あらゆる大地の生命の守護者となった。地人の寿命の数倍のあいだ大地に留まり、幾人かの地人の夫との間に多くの子を産んだ。半神女であり帰天は叶わず、大地のめぐりに還る（※）にしては聖位にすぎる存在であったので、やがてその生ある暮らしに飽いた時、母なる女神の眠る大地の真奥の洞窟の門を守護する形で、やはり界果てまでの眠りについた。

女神の娘の血を継ぐ者たちは《神統》と呼ばれ、特に血の濃い者や能力識見に優れた者の間でゆるやかな互選制を敷いて、一族の統治者たる役目を委譲し繋いだ。

※ひとつの人格として、大地人または獣人・鳥人族の、転生の輪に還ること。

[大移住]

数代を経て、地人族の最初の居住地であった《太古の平原》は、隆起を続ける背骨山脈に取り囲まれる形で大気の稀薄な高原盆地となり、また《最初の泉》の水位上昇につれ湿地域が広がり、増え続ける人口に比して農耕・居住条件が劣化する一方だった。

どのような対策を採るべきかについて有力な《神統》同士の間でも激しく意見が分かれた（※）が、やがて北東壁の《界果て峠》が水圧に耐えかねて崩落し、平原外に出る道が開かれると、積極的に山脈外縁部へと移住を重ねる者たちが増えてきた。

しかしこれに反対し、聖圏結界外への移住をあくまで拒否する残留者たちとの間にはしだいに距離が広がり、疎遠となっていった。

※この時の口論がもとで、移住組の各《神統》同士の間でも親睦が失われ、後の[大分裂]の遠因となったとも言われる。

[大地世界物語 ～人代編～（地誌と年代記） II](#)

2006年4月9日 [連載 コメント \(1\)](#)

【年代記】 II

[大分裂]

大地世界の最多の生命である地人族は、おおむね《銀波清流》の流れに沿って長い年月をかけ移住と拡散を繰り返した。拡散につれ集落相互の連絡も途絶えがちとなり、多くの場合、《本家》と呼ばれる《神統主》の他に、各集落の統治を司る《分統主》や、河筋や街道筋を束ねる《神統補》が選ばれた。やがて各地の様々な《神統》家を支持する者同士で派閥が分かれ、争いが多発し、魔族の残党もまたこれに便乗して跳梁跋扈し、各地方は孤立して、安全な往来が途絶える時代となった。

[再統治]

《神統》家系のはしくれとは言え生まれながらに《血の薄い娘》と蔑称で呼ばれる無力な少女と、その地人族の従兄弟と、偶然知り合った智水学派の青年とが、往来の絶えた大地のありようを憂えて長い長い旅に出た。大地をあまねく経巡り、各地の主たちを説得し、ついには大地の自由な往来を取り戻す。埋もれし古道は整備されて《白の街道》と名付けられ、初の貨幣と貢納（税）制度が定められて、界全体の交易が始まった。

[双統家]

《血の薄い娘》は成人し《女神の遠い孫》の美称を得て大地世界全体を束ねる《白王家》の開祖となり、交易の要衝たる大いなる《銀波清流》の《瀬分けの丘》の一带の森を開いて《白の都》と定めた。

しかしここで自らの聖統を唱える《最も濃い家系》からの横やりが入った。《血の薄い娘》が大地再統一の功績をもって《神統主》の位に就くのは構わぬが、その後継づくりを考慮すれば、統主の伴侶は《最も濃い家系》の者が務めるべきだというのである。

女皇はこれを拒否して、従兄弟である地人族をみずからの夫とし、幾人かの後継者を産んだ。これにより、以後の諸皇の寿命はほとんど一般の地人と変わらぬまでに短いものとなった。

聖性を誇る《最も濃い家系》は彼らを《ただびと》と蔑み、これに臣従するを不服とし、自ら《聖帝家》を名乗り離反した。初代女皇の必死の懇請により戦は回避されたが、彼らは袂を分かち、《帝家》とその眷属は、再び移住と拡散の徒についた。

《白の皇都》の西方には、いにしえの暗洞界軍の魔厄によって永遠に緑の育たぬ《うつほの岩漠》が広がる。後代、それを西南に迂回して更に進んだ厳しい環境の中に、聖なる真力の強い者のみが入都を許される、《西の帝都》が築かれるに至った。

《東の白》と《西の聖》。

疎遠ながらも自由と和平を保つ双都の時代が終わりを告げるのは、はるか後の代に、《皇女戦記編》において語られる物語である。

『 たまねぎ小唄 』 (@中学3年くらいかな?)

2006年7月29日 [連載 \(2周目・大地世界物語\)](#)

たまねぎ小唄

(たまねぎ (ニー) の みそしる (テル／エル) の 歌 (トルタ))

1. たまねぎのおつゆは 不思議と甘い
不思議と甘い
不思議と甘い
たまねぎのおつゆは 不思議と甘い
あの娘の作った
たまねぎのおつゆ。
2. たまねぎのおつゆは 冷めてもそれでも
不思議と甘い
不思議と甘い
たまねぎのおつゆは 冷めてもそれでも
あの娘の作った
たまねぎのおつゆ。
3. たまねぎのおつゆは 薄めて飲んでも
不思議と甘い
不思議と甘い
たまねぎのおつゆは 薄めて飲んでも
あの娘の作った
たまねぎのおつゆ。
4. たまねぎのおつゆは なぜだか苦い
なぜだか苦い
なぜだか苦い
たまねぎのおつゆは なぜだか苦い
自分で作った
たまねぎのおつゆ。

※ ダレムアスでは歌は多く即興で作られ、自分で定めたその歌のパターンの中において、わずかな歌詞の変化と歌い方で、どれだけ豊に感情を表現できるかが、その良し悪しの基準になる。
(ダレムアスには太古のものを祭祀の場合を除けば、叙事詩(クアルト)というものでさえ、あまり発達していない「事」を目的に歌われるのはまれである。この小唄(トルタ)はわりあい古いもので、地球(ティカーセル)の叙事詩(クアルトン)からの...

"たまねぎ戦士の歌"(女剣士「たまねぎ娘」の物語)("ルワブラダ・ミアニーア・エル・クアルトン")(地球語=ティカーセルロク)(※)からの転作と言われ、「大地にそびえる木々たちの根っこの先から梢の先までの間(=大地世界ダレムアスにおける人間たちの住む地をさす)」のかなり広域の人々に親しまれている。この歌に限らず、ダレムアスでは歌詞の解釈ということに関してかなりの自由勝手に許されていて、一見平凡な恋歌風のものが歌手の気分や社会的背景によって風刺から生の讃歌、祈り、深い哲学的思索を歌ったもの……と、それこそ千変万化をとげる。そのまったく同じ歌が普段は労働の際の口ずさびとして意味などおかまいなしに繰り返される。また替え歌が、とりたてて「替える」という意識さえ持たれ得ない程に一般化しているので、ひとたび作者の口から出てしまえば、その詠まれた旋律は万人のものとして化していくだけでも新しい歌詞が付け加えられてゆく。(*)上代の古い旋律にのって最新の風刺が流行したり、逆に古詩(必ずしも曲つきのものとも限らないが)が編み出されたばかりの手法を用いて全く違った風に歌われるなどの例は一々か数え上げようなどという気を起こさせないほどである。

(※ 正確には、大地世界語地球方言が更に地球風になまったもの)。

(*歌詞の不出来なところ、旋律のなめらかでないところなどが情容赦なく改作され続けて、ついには題以外原型をとどめなかった極端な例すら存在する。この場合にも作者の作品を一方的に変える、という意識はなく、一人の提案したものを皆の協力で完成させる、といった雰囲気に近い。つまりダレムアスにおいては、歌の著作権は存在せず、("持ち歌"という意味ではまた別である)、「誰々の」歌ではなく常に「どこそこの」歌なのである。)

このニーテルトルタにしても同じ旋律(歌詞)の別の曲などはいて捨てるほどあり余り、まして少しづつもじったものに至っては「この世に現われては去って行き続ける」人々の数倍のオーダーに昇ることだろう。故にここにあげた4つに番号をふったのは単に便宜上の理由からであり、~~現在一般的原型と認められている一連の恋の物語の中から、前半分の特に好んで歌われるもの(つまりは優れている)~~

このうち、約〇万年前(※ダレムアスの平均寿命が約300年以上あることを考慮してほしい)に旧・大都(たいと)で作られた時の姿をそのまま持っているのは1番だけであり、それでさえむしろ非情に珍しい例である。

ダレムアスにおいては、あまりに万人が歌舞音曲に通じている為にかえって吟遊詩人などの職

業的音楽家が存在し得ない。食卓での会話の合い間に歌が混ざらない方がおかしい程、「音楽」というものが生活になじんでいるのである。（神楽者（かぐらじゃ）などのような神殿づきの音楽師も同様である。彼らも普通の神官であり、ただ祭祀の折に歌曲を奉納する役を負っているので失敗のないよう練習しているという名目である）。

（ダレムアス民謡論試論）

1. 浮く人

浮く人はいるようでいないようで、何時(いつ)でも居るものだという。空に似ていて空でなく、空気そのもののようで空気でもないのだそうだ。

浮く人が何処から来るのか、何処へ還るのか、誰も知らない。のほんとしたその顔を見ていると誰でもそんなことはどうでも良くなってしまう。

大抵の場合そこらの空気の中をふわふわと漂っている。お日さんのある日にはのんびり横寝をしている事もあるが、一番よく見かけられる格好はといえば、あぐらをかいて頭を下に浮いているんだそう。気が向くと木の枝に逆さにぶら下がっていたりもするらしい。

ただ、雨はいけない。たいがいの事には平気な"浮く人"族も、水っ気だけは大層苦手で、少しでも小雨のちらつく朝ともなると、銘々がお気に入りの農家の納屋や台所で、はりにつかまって1日過ごすのだ。

そんな時に気のいいかみさん連中が食事に招んでやると、喜んでふわふわ降りて来て椅子に座る格好だけマネをする。実は尻は最後まで宙に浮いたまんまなのだが、そんな事は大事な事じゃないし、浮く人は皆たいそう大人しい行儀のいい連中なので、誰も気に留めない。

浮く人は口を利かない。喋らないし字も書かない。ので、浮く人が普段どんな暮らし振りをしているのかはまるで判らないのだ。

別に働いているわけじゃない。果樹や小動物を捕っている所を見た者もないし、踊りをするわけでもない。無論、口が利けないのだから小唄も歌わない。ただいつでもふわふわ空中を漂っているだけなのだ。

南のアニャンワマンの国の田舎.....暖かい空気がいい？

ひみつ日記

.....たぶん、飛仙族のなかで、とりわけアタマがのんびり出来ちゃった人が、ふわふわ漂って暮らしているところが、伝承化した、んだと思います.....(笑)。

[「くらり。」](#)

2013年8月17日 [リステラス星圏史略](#) (創作) [コメント \(3\)](#)

(下書き中)

たっぷりの水に米をいれて弱火で時間をかけて煮くずし煮溶かした食べものを粥という。

ふつうこの食べ物は稲という水生植物の種からもみがらという皮をこそげとった米を生のまま使ってつくるのだが、皮をこそげずに煮込むものも玄米粥といってまた滋味豊かであるし、いちどひたひたの水で茹できって「炊いた」ご飯という状態に、さいど湯をたして煮なおしてつくる冷や飯粥というつくりかたもある。

タンテネイトラ地方のハグネの国ではとくに生の米を煎って茶色くぱりぱりにしたものをじっくり時間をかけて煮込む〈くらり〉と呼ばれる粥が好まれていて、これは時間をかければかけるほど、まとめてたくさん作るほど、美味しい。

大人数でともに作り、一緒に食べればなお美味しい。

くらり粥。と呼ばれる煮込み鍋の集まりがとくに冬のあいだの街道筋での娯楽となっている。

リステラス星圏史略 古資料ファイル 2-2

<http://p.booklog.jp/book/102982>

著者：霧樹里守 & 土岐真扉

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/masatotoki/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/102982>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/102982>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ